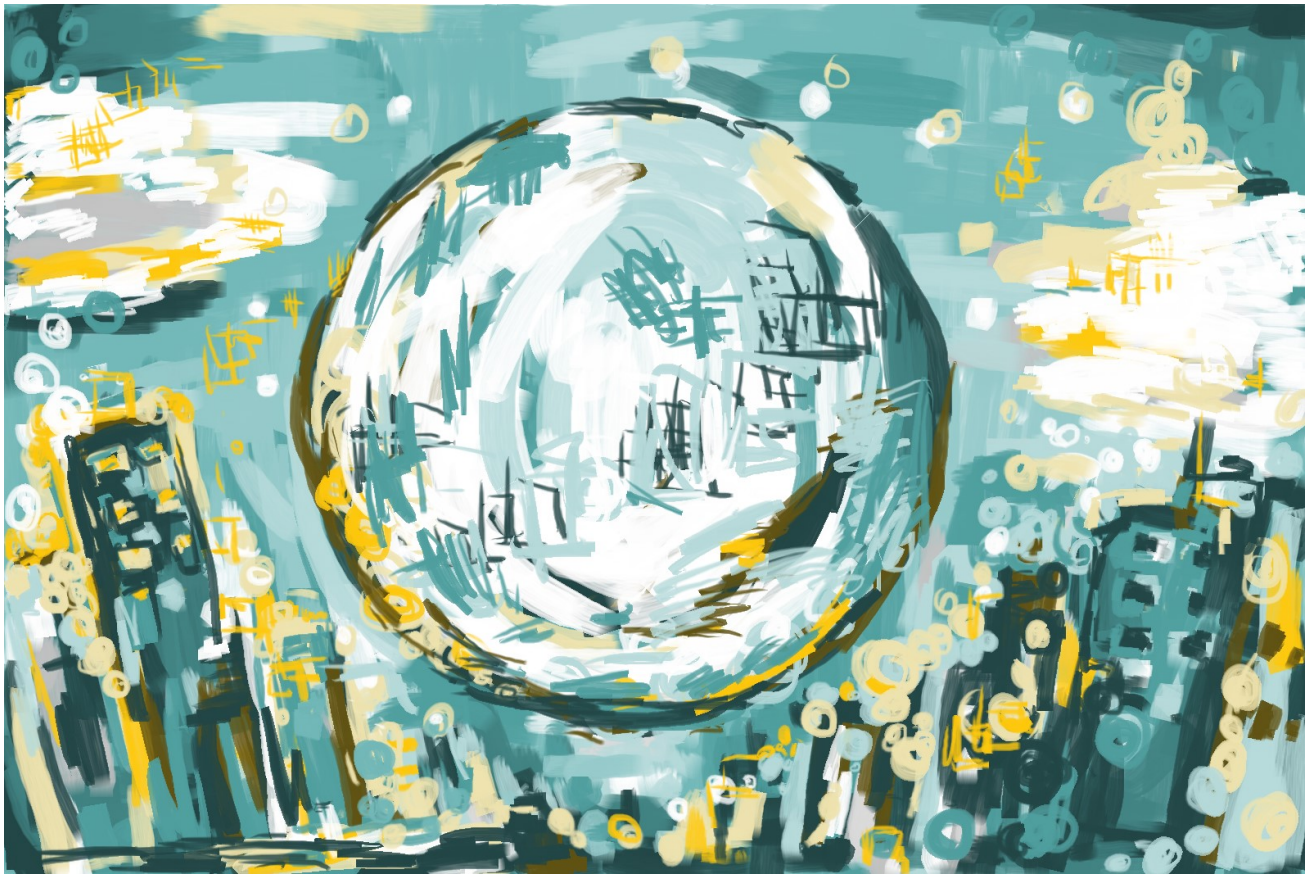
Printed 2019.0630 ISSN 2189-4957
Published by Asian Society of Human Services

Total Rehabilitation Research

June 2019
7



Mamiko OTA
[Midnight Town]

Asian Society of Human Services

DOI: https://doi.org/10.20744/trr.7.0_45
Total Rehabilitation Research, VOL.7 45-60

Original Articles

自伝的記憶の社会的機能に対する抑うつと自尊心の影響に関する一考察

田上　恭子 1)

1)　愛知県立大学看護学部

＜Key-words＞
自伝的記憶，社会的機能，抑うつ，開示抵抗感，自尊心

tagamik@nrs.aichi-pu.ac.jp（田上 恭子）

Total Rehabilitation Research, 2019, 7:45-60. © 2019 Asian Society of Human Services

Ⅰ．問題と目的

1. はじめに

厚生労働省の「平成 29 年（2017）患者調査」（厚生労働省，2019）によると，うつ病を含む「気分［感情］障害」の総患者数は 127 万人であり，平成 8（1996）年から約 20 年の間にほぼ 3 倍の増加がみられている。また「第 2 回日本人の就業実態に関する総合調査」（独立行政法人労働政策研究・研修機構，2016）からは，過去 3 年間でメンタルヘルス上の不調を感じたことがあると回答した人は 25.7%，内 13.3%が結果的に退職に至っていること，休職・復職者が 4.0%であることが報告されている。このような状況の中で，労働者のメンタルヘルスの保持・増進に向けての対策が大きな課題となっており，職場における心の健康づくり（厚生労働省・独立行政法人労働者健康安全機構，2019）やメンタルヘルス不調者に対する治療と就労の両立支援（独立行政法人労働者健康安全機構, 2017）などが求められている。そして医療機関をはじめとして，職場復帰に向けてのリワークプログラムがさまざまに実践・検討されている（e.g.，五十嵐，2017；音羽，2017；吉原・岩井・田中ら，2018）。うつ病患者等に対するリワークプログラムでは集団認知療法など心理療法やグループディスカッションも活用されており，集団プログラムの中で対人関係能力を改善させることがひとつのねらいとなっている（五十嵐・大木，2017）。また参加者同士の互いの心理的サポートが治療上大きな要因となることが多いと音羽（2017）は述べている。他者との交流の中では，必然的に自身について語ることが必要である。また自身について語るためには記憶の想起が必要になることも多い。他者との相互作用において，個人的な記憶はどのような働きをしているのだろうか。またそれは抑うつとどのように関連しているのであろうか。本研究では自伝的記憶の社会的機能に着目し検討したい。

Received
May 30, 2019

Revised
June 11, 2019

Accepted
June 14, 2019

Published
June 30, 2019

2. 自伝的記憶の社会的機能

自伝的記憶（autobiographical memory）とは，自己に関連する情報についての記憶であり，個人の過去の中から思い出される特定のエピソードについての記憶である（Brewer，1986）。近年の自伝的記憶研究においては，「なぜ個人的なエピソードを思い出すのか」というその機能への関心が増しており，これまで大きく自己機能，社会的機能，方向づけ機能の3つにまとめられている（Bluck，2003）。この中で社会的機能とは社会的目的のために自伝的記憶を用いることであり（Alea & Bluck，2003），自伝的記憶が会話材料を提供しそれによって全般的に社会的相互作用が促進されることや，個人的記憶を共有することで他者に教訓や助言を与えられること，共感がもたらされることなど，先行研究の見解を Bluck（2003）は紹介している。このように自伝的記憶は社会的絆を構築し，維持し，強化していく上で重要であることが指摘されている。

さらに社会的機能には3つの機能がある（Alea & Bluck，2003）。第一は親密性機能であり，関係における親密性を促進するために自伝的記憶が用いられる。第二に教訓・情報提供機能があり，自伝的記憶を用いて他者に要点を示したり助言を行ったりすることができる。そして第三は共感機能であり，自伝的記憶を用いることで他者から共感を引き出したり共感を示したりすることができる。このように自伝的記憶の想起は社会的な文脈の中でも行われており，自伝的記憶は対人的性質を有するものであるといえる。

この自伝的記憶の社会的機能は「語り」や聴き手の存在とも密接に関連する。自伝的記憶を共有した後は会話の相手とより近く感じることは自己開示研究からも示されている（Alea & Bluck，2007；Beike，Brandn & Cole，2016）。また自己について想起された記憶のすべてが語られるわけではなく，他者の存在を前提として想起されたものの一部が語られるのみである（野村，2008）。私たちは他者を前にした際，何を想起し，何を語るのだろうか。そしてなぜあることを語り，なぜあることを語らないのだろうか。Alea & Bluck（2003）は，語り手と聴き手の双方の特性と両者の関係性，記憶特性などが自伝的記憶の社会的機能に影響することを示唆している。

3. 語りと自己開示，開示抵抗感

語りや自伝的記憶の社会的機能に関わる研究に，上述の自己開示に関する研究が挙げられる。Beike，Brandn & Cole（2016）は，他者と情報を共有することが親密性を高めるということに関しては，自伝的記憶の研究以前に長らく社会心理学の領域で自己開示研究が行われてきたと述べている。自己開示（self-disclosure）とは，文字通り自己を他者に開くことであり，個人的な情報を他者に知らせる行為である（榎本，1997）。自己開示に関する研究領域では，自己開示の量や質に影響を及ぼすさまざまな要因が検討され，上述のような語り手・聴き手の特性や関係性，内容などの影響について膨大な数の研究がなされてきた。また自己開示が及ぼす影響，すなわち自己開示の機能についても検討されており，自己開示が親密性を促進することや治療的効果を有するものであることなどが明らかにされている（榎本，1997）。特に否定的な心理状態にある人にとって自己開示は，身体的・精神的健康上重要な効果を持つことがこれまでの多くの研究から示されている（片山，1996）。さらに何のために自己開示をしたいのかという自己開示動機についても検討され，さまざまな動機が見出されている（e.g.，榎本，1997；小口，1989）。

一方で，自己開示による悪影響についても検討され，自己開示への抵抗感に関する研究も

みられるようになった。遠藤（1994）は，自己開示の対人的影響は大きく，開示者にとって自己の内面性を表出することは他者からの評価にさらされる危険性があり，深い自己開示ほど抑制され躊躇されるのは受け手への影響を予期することによるためであると述べている。そして自己表出に伴う抵抗感を「開示抵抗感」と名づけ，その構造を検討し，「評価懸念」や「否定的感情表出に関わる抵抗感」など 5 つのカテゴリーを見出している。片山（1996）は自己開示に抵抗を感じる要因を他者との関係に影響を与える対他的要因と，他者との関係には影響せず自分自身のみに影響する対自的要因とに分けて論じ，自尊心の低い人は対自的要因によって否定的内容の自己開示に抵抗を感じることを示している。

松下（2005）は，他者に語ることによって経験の意味づけが変わるというナラティブ・アプローチの立場から，ネガティブな経験を具体的に想起してもらい，その意味づけと開示抵抗感について検討を行った。ネガティブな経験の意味づけ方を類型化し開示抵抗感を比較した結果，ネガティブな経験が現在の自身に否定的な影響を及ぼしていると意味づけるタイプはネガティブな経験の開示抵抗感が高いことを示している。Beike，Brandn & Cole（2016）は自己開示と自伝的記憶の共有の違いについて，前者は具体的な自伝的記憶に限らず自己に関するさまざまな情報が含まれることを指摘している。松下（2005）は具体的な経験を想起し，それを他者に話すときに生じる抵抗感を測定するという方法を用いていることから，本研究は松下（2005）にならい，具体的な出来事についての開示抵抗感を検討することで自伝的記憶の社会的機能にアプローチしたい。

4. 本研究の目的

前述のように，自己開示に関する研究領域において，ネガティブな内容の開示抵抗感にはさまざまな側面があること，自尊心など開示者の特性によって異なることが示されてきている。うつ病等のメンタルヘルスの不調を抱える者が，職場復帰に向けて集団プログラムに加わる際，どういった理由からあることを他者に語り，あるいは語らないのか・語りたくないのかを考えることは，よりよい心理学的援助を行う上で重要ではないかと考えられる。そこで本研究は，抑うつと具体的な出来事の開示抵抗感との関連を明らかにすることを第一の目的とする。なお，他者に語ることに抵抗を感じるのはネガティブな内容に限られないと考えられる。自身にとってポジティブな内容でも他者には語りたくないこともあるだろう。そこで本研究ではネガティブな内容の開示抵抗感に加え，ポジティブな内容の開示抵抗感についても検討を行う。また抑うつに加え，先行研究においてネガティブな内容の開示抵抗感について検討された自尊心との関連も併せて検討する。自尊心の高さは心理的な適応を表すものであると考えられており（小塩，2001），心理的適応状態との関連を明らかにすることもまた，メンタルヘルス不調者への支援に役立ち得るものと考えられる。

第二に，本研究では語ることの抵抗感に加え，どういった出来事をどうして語りたいのかという点にも着目する。前述したように自伝的記憶の社会的機能として記憶の特性の影響が挙げられているが，本研究はその特性として内容の望ましさと重要度に着目する。そしてその語りたい出来事をどうして語りたいのかという理由を検討することは，その出来事の記憶がどのように対人的に機能するのかを明らかにする手がかりを与え得るものと考えられる。このことから，語りたい出来事の特性とそれを語りたい理由に抑うつ及び自尊心がどのように関連するのか明らかにすることを第二の目的とする。

以上の検討を通し，抑うつと自伝的記憶の社会的機能について，さらにはうつ病等のメンタルヘルス不調者の職場復帰に向けての支援について考察したい。

Ⅱ．方　法

1. 対象と手続き

大学生 196 名を対象とした質問紙調査を行った。調査は心理学関連の講義の中で集団実施し，即時回収を行った。回答は無記名であり，回答に強制力が働かないよう教示において留意した。調査用紙への回答及び提出をもって調査協力の同意が得られたものとした。なお調査終了後，講義において調査内容の解説を行った。

2. 調査内容

1) フェイスシート

年齢と性別を尋ねた。

2) ネガティブな出来事の開示抵抗感

松下（2005）による開示抵抗感尺度を用いた。「直面化傷つき因子」「他者評価懸念因子」「否定的自己評価因子」「伝達困難性因子」の 4 因子 15 項目から構成される尺度である。辛かったり嫌だったりした出来事をひとつ想起するよう教示し（想起内容の報告は求めなかった），そのことを他者に話すときに生じる抵抗感について 4 件法で回答を求めた。

3) ポジティブな出来事の開示抵抗感

嬉しかったり良かったりした出来事をひとつ想起してもらい（想起内容の報告は求めなかった），他者に話すときに生じる抵抗感について 30 項目を提示し 4 件法で回答を求めた。項目は，大学生 10 名を対象に行った予備調査と松下（2005）に基づき作成した。

4) 他者に語りたい具体的出来事について

自分が経験した具体的出来事で他者に語りたいと思うものをひとつ想起してもらい，簡単な記述を求め，そのエピソードの「望ましさ」と「重要度」を各 7 件法で評定してもらった。またその出来事を他者に語りたい理由について 30 項目を提示し 4 件法で回答を求めた。項目は，予備調査，松下（2005），Alea & Bluck（2003）をもとに作成した。

5) 自尊心

Rosenberg の自尊心尺度邦訳版（山本・松井・山成，1982）を用いた。教示・項目は清水（2001）を用いた。10 項目 5 件法の尺度であり，得点が高いほど自尊心が高いことを示す。

6) 抑うつ

日本語版 BDI-II（Beck，Steer & Brown，1996）を用いた。21 項目 4 件法尺度。得点が高いほど抑うつ症状が重篤であることを示すものである。

3. 統計分析方法

自作の項目については因子分析（最尤法，プロマックス回転）を行った。抑うつ及び自尊心が開示抵抗感に及ぼす影響については，従属変数として開示抵抗感の各下位尺度得点，独立変数として属性を Step 1，抑うつと自尊心を Step 2 とする階層的重回帰分析を行った。語りたいエピソードの特性に関しては，望ましさと重要度による比率の違いについて χ^2 検定を用い検討し，抑うつと自尊心との関連についてそれぞれ 2 要因分散分析を用い検討した。語りたい理由に及ぼす影響については，従属変数として語りたい理由の各下位尺度得点，独立変数として Step 1 に属性を，Step 2 に抑うつ，自尊心，出来事の望ましさ，重要度を投入した階層的重回帰分析を実施した。なお統計学的有意水準は 5%未満とした。分析には SPSS ver.26 を使用した。

Ⅲ．結　果

1. ポジティブな出来事の開示抵抗感，及び他者に出来事を語りたい理由についての因子分析

有効回答数は 163 名（男性 55 名，女性 108 名；平均年齢 18.99±0.98 歳）であった。

自作のポジティブな出来事の開示抵抗感 30 項目，及び他者に出来事を語りたい理由 30 項目について，それぞれ床効果が認められた 1 項目を除外し，各 29 項目について因子分析（最尤法，プロマックス回転）を行った。因子負荷量が.40 に満たない項目と複数の因子に.40 以上の負荷量がみられた項目を除き繰り返し分析を行った。

結果，ポジティブな出来事の開示抵抗感については 20 項目 5 因子が抽出された。累積寄与率は 59.1%であった。第 1 因子は松下（2005）の開示抵抗感尺度の「他者評価懸念因子」と「否定的自己評価因子」に含まれる項目が双方含まれており，他者からの否定的評価懸念と否定的な自己評価の両面を示すと解釈されたため，「否定的評価因子」（α=.85）と命名した。第 2 因子は「自慢話だと思われそうで嫌だ」など 5 項目から成り，「自己顕示抑制因子」（α=.87）と命名した。第 3 因子は「話す必要がない」など 5 項目から成り「共有不要因子」（α=.81）と命名した。第 4 因子は「相手に共感してもらえないだろう」など 3 項目から成り，「無理解予想因子」（α=.78）と命名した。第 5 因子は「相手を傷つけてしまいそうだ」など 2 項目から成り，「傷つけ懸念因子」（α=.69）と命名した。

他者に語りたい理由に関する項目については，因子分析の結果，21 項目 4 因子が抽出された。累積寄与率は 55.2%であった。第 1 因子は「相手に共感して欲しい」など 9 項目から構成され，「共感・親密性期待因子」（α=.89）と命名した。第 2 因子は「そのことを話す自分は立派だ」など 5 項目から構成され，「積極的自己呈示因子」（α=.82）と命名した。第 3 因子は，「相手を楽しませたい」など 4 項目から構成され，「エンターテイメント性因子」（α=.82）と命名した。第 4 因子は，「相手にアドバイスしたい」など 3 項目から成り，「教訓・情報提供因子」（α=.70）と命名した。

松下（2005）の開示抵抗感尺度についても各因子の α 係数を算出したところ，「直面化傷つき因子」「他者評価懸念因子」「否定的自己評価因子」についてはいずれも.80 を上回ったが，第 4 因子「伝達困難性因子」は α=.58 であった。なお，α 係数が.80 を下回る因子もみられたが，いずれの因子も分析の対象とすることとした。

2. ネガティブな出来事の開示抵抗感と抑うつ，自尊心との関連

松下（2005）による開示抵抗感尺度 4 因子それぞれに含まれる項目の平均値を各下位尺度得点とした。独立変数を Step 1 属性，Step 2 抑うつと自尊心，従属変数を各下位尺度得点とする階層的重回帰分析（強制投入法）を行った。結果を表 1 に示す。「直面化傷つき」「他者評価懸念」の回帰式は有意ではなかったが，いずれも Step 2 における分散説明率の増分は有意であった（ΔR^2=.04~.07，*p*s<.05）。「直面化傷つき」「他者評価懸念」には自尊心の正の影響が（β=.18，*p*<.05；β=.16，*p*<.05），「否定的自己評価」と「伝達困難性」には抑うつの正の影響が（β=.23，*p*<.01；β=.22，*p*<.01）それぞれ有意であった。なお，「伝達困難性」は女性が高く感じることが示された（β=.24，*p*<.01）。

表 1　ネガティブな出来事の開示抵抗感についての階層的重回帰分析結果

	ネガティブな出来事の開示抵抗感							
	直面化傷つき		他者評価懸念		否定的自己評価		伝達困難性	
独立変数	β	ΔR^2	β	ΔR^2	β	ΔR^2	β	ΔR^2
Step 1		.02		.01		.02		.06*
性別 [a]	.03		.09		.10		.24**	
年齢	−.11		−.01		−.08		.05	
Step 2		.04*		.05*		.07**		.05*
抑うつ	.08		.14		.23**		.22**	
自尊心	.18*		.16*		.11		.00	
R^2	.05		.06		.09**		.10**	

注）[a] 男性 0，女性 1 とした。
*p<.05，**p<.01

3. ポジティブな出来事の開示抵抗感と抑うつ，自尊心との関連

因子分析によって抽出された 5 因子それぞれに含まれる項目の平均値を下位尺度得点とし，ネガティブな出来事の開示抵抗感と同様に階層的重回帰分析を行った。結果を表 2 に示す。いずれも Step 2 の R^2 の増分は有意であり（ΔR^2=.05~.14，*p*s<.05），いずれも回帰式は統計的に有意であった。いずれの下位尺度に対しても，自尊心の有意な影響は認められず，抑うつのみが有意な正の影響を及ぼすことが示された（β=.24~.37，*p*s<.01）。

表 2　ポジティブな出来事の開示抵抗感についての階層的重回帰分析結果

独立変数	ポジティブな出来事の開示抵抗感									
	否定的評価		自己顕示抑制		共有不要		無理解予想		傷つけ懸念	
	β	ΔR^2	β	ΔR^2	β	ΔR^2	β	ΔR^2	β	ΔR^2
Step 1		.00		.02		.00		.02		.10
性別 [a]	.03		.10		−.01		−.05		−.07	
年齢	−.03		−.09		−.02		−.15		−.08	
Step 2		.14***		.09**		.09***		.05*		.12***
抑うつ	.37***		.28***		.31***		.24**		.35***	
自尊心	.02		.08		−.03		−.02		−.02	
R^2	.14***		.11**		.10**		.08*		.13***	

注）[a] 男性 0，女性 1 とした。
*p<.05，**p<.01，***p<.001

4. 語りたい出来事の特性

語りたい出来事の望ましさの全体の平均は 5.08±2.05（得点範囲 1~7）であった。評定値 1~3 を「ネガティブ」な出来事，評定値 5~7 を「ポジティブ」な出来事とした。また，語りたい出来事の重要度の全体の平均は 5.18±1.93（得点範囲 1~7）であった。同様に，評定値 1~3 を「重要でない」出来事，評定値 5~7 を「重要である」出来事とした。それぞれの度数を表 3 に示す。ポジティブで重要な出来事を回答した者が半数を超えていた。またネガティブな出来事については，重要でないものと重要であるものとがほぼ同数回答されていた（χ^2（1，N=123）=16.54，p<.001，Cramer's V=.37）。

表 3　語りたい出来事の特性別度数

	重要でない	重要である	計
ネガティブ	13（10.6%）	14（11.4%）	27（ 22.0%）
ポジティブ	12（ 9.8%）	84（68.3%）	96（ 78.0%）
計	25（20.3%）	98（79.7%）	123（100.0%）

次に語りたい出来事の特性と抑うつ，自尊心との関連を検討した。出来事の特性別の抑うつと自尊心の平均得点を表 4 に示した。抑うつと自尊心をそれぞれ従属変数とし，出来事の望ましさと重要度を独立変数とする 2（ネガティブ，ポジティブ）×2（重要でない，重要である）の 2 要因分散分析を行った。

抑うつについては，望ましさの主効果のみ有意であり（F(1, 119) =5.99, p<.05, η_p^2=.05），語りたい出来事がネガティブであった者の抑うつ得点が有意に高かった。

自尊心については，重要度の主効果，及び望ましさと重要度の交互作用が有意であった（F（1，119）=4.92，p<.05，η_p^2=.04；F（1，119）=3.97，p<.05，η_p^2=.03）。交互作用について単純主効果の検定を行った結果，ネガティブで重要でない出来事を回答した者の自尊心が有意に低いことが示された（F（1，119）=7.28，p<.01，η_p^2=.06）。

表 5　語りたい出来事の特性別の抑うつ，自尊心の平均得点と標準偏差

語りたい出来事の特性	抑うつ		自尊心	
	M	*SD*	*M*	*SD*
ネガティブ				
重要でない（*n*=13）	15.46	5.11	29.77	5.69
重要である（*n*=14）	16.43	9.57	33.79	4.84
ポジティブ				
重要でない（*n*=12）	11.42	5.90	32.42	3.48
重要である（*n*=84）	11.15	7.92	32.63	3.39

5. 語りたい理由に及ぼす影響

ある具体的な出来事を語りたい理由について因子分析によって抽出された 4 因子それぞれに含まれる項目の平均値を下位尺度得点とした。各下位尺度得点を従属変数とし，独立変数として Step 1 属性，Step 2 抑うつ，自尊心，出来事の望ましさ，重要度とする階層的重回帰分析をそれぞれ実施した。結果を表 6 に示す。いずれも Step 2 における ΔR^2 は有意であり（ΔR^2=.08~.16，*p*s<.01），回帰式も統計的に有意であった。自尊心が高いほど，また女性の方が「共感・親密性期待」が高いことが示された（β=.23，*p*<.01；β=.19，*p*<.05）。自尊心の正の影響に加え，出来事がポジティブであるほど「積極的自己呈示」という理由が高かった（β=.28，*p*<.001；β=.18，*p*<.05）。また自尊心の正の影響に加え，出来事が重要ではないほど，他者を楽しませたいという「エンターテイメント性」が高かった（β=.25，*p*<.01；β=−.18，*p*<.05）。出来事の重要度が高いほど「教訓・情報提供」という理由で語りたいことが示された（β=.27，*p*<.01）。なおいずれも抑うつの影響は認められなかった。

表 6　出来事を語りたい理由についての階層的重回帰分析結果

	語りたい理由							
	共感・親密性期待		積極的自己呈示		エンターテイメント性		教訓・情報提供	
独立変数	β	ΔR^2	β	ΔR^2	β	ΔR^2	β	ΔR^2
Step 1		.05*		.01		.01		.00
性別 [a]	.19*		−.06		−.01		−.02	
年齢	−.08		−.11		−.08		.04	
Step 2		.09**		.16***		.09**		.08**
抑うつ	.05		.11		−.03		−.03	
自尊心	.23**		.28***		.25**		.11	
出来事の望ましさ	.10		.18*		.12		−.05	
出来事の重要度	.09		.10		−.18*		.27**	
R^2	.13**		.17***		.09*		.09*	

注）[a] 男性 0，女性 1 とした。
*p<.05，**p<.01，***p<.001

Ⅳ．考　察

1. ネガティブな出来事の開示抵抗感と抑うつ，自尊心との関連

抑うつ及び自尊心がネガティブな出来事の開示抵抗感に及ぼす影響について，重回帰分析の結果，「直面化傷つき」と「他者評価懸念」は自尊心の正の影響が，「否定的自己評価」及び「伝達困難性」には抑うつの正の影響が認められた。このことから，自尊心が高いほどネガティブな出来事を語ることでの自身のさらなる傷つきを恐れ，他者からの評価を気にして語りが抑制されると考えられる。一方抑うつが高いほど，ネガティブな出来事を語ることで自己評価の低下をおそれ，また話したところで他者に伝わらないだろうという思いから語りが抑制されるのではないかと考えられる。

片山（1996）は，否定的な内容の自己開示の抑制因は対自的要因と対他的要因に分けられることを示し，自尊心の低い者は，傷つくことを回避しようとするため，自身に悪い影響が及ぶのを避けるためといった対自的要因によって否定的内容の自己開示に抵抗を感じると論じている。また松下（2005）は作成した開示抵抗感尺度について，「他者評価懸念」「伝達困難性」は対他的要因に，「直面化傷つき」「否定的自己評価」は対自的要因に分けられるとしている。このように先行研究ではネガティブな出来事の開示抵抗感は対自・対他要因に分けられてきたが，本研究の結果からは，抑うつ及び自尊心と開示抵抗感との関連に関しては，対自的要因と対他的要因とに明確に分かれるものではないことが示唆される。抑うつが影響していることが示された「否定的評価」「伝達困難性」は，話す自身が情けない，ダメな人間に思えそうだという抵抗感と，うまく表現できないだろう，理解してくれないだろうという抵抗感であるが，共通して無力感が関係していることも想定され得る。そしてその無力感がネガティブな語りを抑制している可能性があるかもしれない。一方自尊心に関しては，話すことでより辛くなるだろうといった「直面化傷つき」と，相手から嫌われそうだ，相手の評価が気になるといった「他者評価懸念」という，いずれも自己もしくは自己愛を傷つけるおそれと関連している可能性が推察され，そのためにネガティブな語りが抑制されるとも考えられ得る。これらの点についてはさらなる検討が必要であるが，ネガティブな出来事の開示抵抗感に関して，特に精神的健康との関連をより明らかにしていくためには，対自・対他とは異なる次元で捉えることも今後必要であると考えられる。

なお，ネガティブな出来事の「伝達困難性」は女性が高く感じることが示された。すなわち，女性の方が男性に比べ，話したところで他者に伝わらないだろうという思いから語りが抑制されることが示唆される。ある出来事を語りたい理由についての分析結果から，「共感・親密性期待」は女性が高いことが示されたことを合わせて考えると，女性は分かってもらいたい，共感してもらいたいという思いから語りがなされることが多く，逆にそう感じられない場合にはネガティブな出来事を語りたいと思いにくいことが考えられる。ただしこの性差についてはさらなる検討が必要であるだろう。

2. ポジティブな出来事の開示抵抗感と抑うつ，自尊心との関連

分析の結果，見出された 5 つの下位尺度全てにおいて抑うつの正の影響が認められたが，自尊心の影響は認められなかった。このことから，抑うつ状態が重篤であるほど，ポジティブな出来事を他者に話すことへの抵抗感は全般的に高いことが示唆される。さらに下位尺度の内容を踏まえると，ポジティブな語りをすることで自他の評価の低下や相手を傷つけるこ

とを恐れ，どうせ分かってくれないだろう，話す必要もないだろうというような諦めが強く，さらには自己顕示的であってはならないという思いから，抑うつが高くなるとポジティブな語りの抑制につながるのではないかと考えられる。一方，自尊心の影響は認められなかったことから，心理的適応とポジティブな出来事の開示抵抗感とは関連しないことが示唆され，ネガティブな出来事の語りとは異なり，自尊心を維持し続けるためにポジティブな語りが抑制されるわけではないことがうかがわれる。

一般的にポジティブな出来事を他者に語ることへの抵抗は，ネガティブな出来事を語るより低いように捉えられやすいのではないかと考えられるが，本研究の結果から，抑うつ状態にある者にとっては，ポジティブな出来事こそ他者に語るのにためらいを強く感じる可能性がうかがわれ，こういった点を考慮した支援が特に集団を対象とした場においては必要であることが示唆される。

3. 語りたい出来事の特性と語りたい理由

望ましさと重要度から語りたい出来事の特性を検討した結果，他者に語りたいと思う出来事は全般的に自身にとってポジティブで重要であることが明らかとなった。

抑うつとの関連については，ネガティブな出来事を語りたいと回答した者の抑うつ得点がポジティブな出来事を語りたいと回答した者より有意に高いことが示された。すなわち抑うつ状態が高いと，ポジティブな出来事を語りたいとは思いにくいことが推察される。野村（2008）は，自己についての語りの多くは自己について想起された記憶を基盤にしていると述べている。こういった見解から，抑うつ状態においてポジティブな出来事が語りたいと思われにくいことは，これまで先行研究で見出されてきた抑うつ状態ではネガティブな出来事がより想起されやすいこと（e.g.，田上，2002；2017）と関連していることが示唆される。すなわち抑うつ状態におけるネガティブな記憶へのアクセシビリティの高さが，ネガティブな出来事の方を語りやすくさせているのではないだろうか。先に論じたポジティブな出来事の開示抵抗感と抑うつの関連についても同様に，ポジティブな記憶へのアクセシビリティの低さが影響している可能性も考えられ得るだろう。これらのことから，抑うつ状態にある者にポジティブな出来事を語ってもらうことは，心理的な負荷を大きく与えてしまうおそれがあることが示唆され，支援においては留意する必要があると考えられる。

自尊心との関連については，ネガティブで重要でない出来事を語りたいと回答した者の自尊心得点が有意に低かった。自尊心の低い者は抑うつ者と同様ネガティブな出来事の方を語りたいと感じ，さらに自身にとって重要ではない出来事，すなわち自己の関与が少なく，自己を傷つけるおそれのない出来事を語りたいのではないかと推察される。自尊心の低い状態とは心理的適応状態が良好ではない状態であると考えられ，そういった状態では抑うつと同様，ネガティブな記憶へのアクセシビリティが高くなっていることが考えられる。加えて自己が傷つくおそれを回避し自己を守るために，自身にとって重要ではない出来事を語りたいのではないかと考えられる。

次に，なぜある具体的な出来事を語りたいのかという理由について検討した結果，どの下位尺度においても抑うつの影響は認められなかった。抑うつの高さは開示抵抗感を高めると考えられるが，抑うつの低さが何らかの理由による積極的な語りをもたらすわけではないことがうかがわれる。

自尊心の影響については,「教訓・情報提供」以外の 3 つの下位尺度で正の影響が認められた。すなわち，自尊心が高いほど，共感を引き出すことや親密な関係になることを期待するために，自身を積極的にアピールするために，そして相手を楽しませるために語りがなされることが示唆される。このことから，自尊心の高い者はより他者とつながろうとする動機が高く，他者とつながるために語りや記憶を用いていることがうかがわれる。

出来事の望ましさの影響については,「積極的自己呈示」においてのみ，自尊心とともに正の影響が認められた。他者に自身を積極的にアピールするためにはポジティブな出来事が語られやすいと考えられる。

出来事の重要度の影響については,「エンターテイメント性」で負の影響が自尊心の正の影響とともに認められ,「教訓・情報提供」で正の影響が認められた。他者を楽しませるためには，自身にとって重要な出来事よりはどうでもいいと考えられるような出来事が語られやすいことが示唆される。そして重要だと感じる出来事については，抑うつや自尊心といった語り手の特性は関係なく，他者のために語りたいと認識されることが示唆される。

なお,「共感・親密性期待」は女性が男性よりも高いことが示された。前述の通り，女性は男性に比べ相手から共感を引き出したい，相手と親密になりたいという思いで語りを行いやすいことが示唆される。この点についてはさらなる検討が必要であると考えられる。

4. 自伝的記憶の社会的機能に関する考察

自伝的記憶の社会的機能には，親密性機能，教訓・情報提供，共感機能の 3 つの機能が想定されており，語り手と聴き手の双方の特性，両者の関係性，記憶の特性などが影響すると概念モデルにおいては考えられている（Alea & Bluck，2003）。本研究はその中で語り手の特性として抑うつと自尊心，記憶の特性として望ましさと重要度に着目し，開示抵抗感と語りたい理由について検討を行った。

ある具体的な出来事を語りたい理由の分析から，親密性を促進させたり共感を引き出したりするために具体的な記憶が用いられることには自尊心が関連していることが示唆された。また,開示抵抗感の分析からは,ネガティブな出来事に関しては自尊心の関連もみられたが,ポジティブな出来事の開示抵抗感には抑うつのみが関連していることが示された。このことから，自尊心が保たれた心理的に適応的な状態では，具体的な自伝的記憶が他者とのつながりを維持・強化するなど社会的目的のために用いられることが示唆される。一方で，抑うつ状態が高いと語りが抑制されることが示唆され，背景として記憶の想起上の特徴も関連している可能性もうかがわれた。このことから，抑うつなどメンタルヘルス上の問題がある状態においては，社会的目的のために記憶が想起・活用されにくいと考えられる。逆に，自伝的記憶を社会的に活用することで，心理的適応状態を保つことができるとも考えられる。

抑うつにおける自伝的記憶研究では，抑うつ者の特徴として自伝的記憶の概括化がこれまで見出されており，そのことによって問題解決能力が低下することが示されている（e.g.，松本・望月，2012 ; Williams，Barnhofer，Crane et al.，2007）。社会的な問題解決能力の測定方法のひとつに対人的な問題場面を呈示し解決方法を挙げるよう求める課題がある。このような問題解決課題における自伝的記憶のはたらきについては主として方向づけ機能としてこれまで論じられてきているが，課題において用いられている対人的問題という場面・課題の性質を考えると，そこには自伝的記憶の社会的機能も関与していることが考えられる。すなわち過去の記憶を具体的に想起し類推的に用いて問題解決を行うだけではなく，他者との

つながりや関係性の発展を意図・期待して自身の記憶を用いることも，対人的問題の解決を考える上で行われている可能性もあるのではないだろうか。本研究では語りたい出来事の詳細さや具体性については測定していないが，このことからひとつの見解として抑うつ状態においては概括的な記憶が想起されるためにそれを社会的目的のために活用することが困難である，つまり社会的に自伝的記憶が機能しにくいのではないかということが考えられるだろう。また逆に，抑うつにおいて対人的・社会的問題解決が困難であるのは，抑うつにおいては他者とつながることへの動機がそもそも低く，社会的目的のために記憶が想起・活用されにくいからではないかということもあるかもしれない。これらの点については，今後精緻な手続きを用いて明らかにすることが必要であるだろう。

最後に，自伝的記憶の社会的機能における教訓・情報提供機能に関しては，本研究の検討結果からは出来事の重要度が関わっていることが示唆された。これまで自伝的記憶の社会的機能については他者との親密性との関連で検討されることがほとんどであり，この教訓・情報提供機能については明らかになっていない点が多いと考えられる。本研究では概念モデルの一部を取り上げ，探索的に記憶特性として重要度と望ましさを検討したのみであり，特に聴き手の特性や関係性の影響なども含め，教訓・情報提供機能についても実証研究を蓄積していくことが必要であると考えられる。

5. 臨床への示唆

抑うつと開示抵抗感及び語りたいある具体的な出来事の内容と語りたい理由との関連の検討から，前述したように抑うつ状態では特にポジティブな語りをしにくいといった特徴や自伝的記憶を他者と関係を構築するためや対人的問題を扱うためなど社会的にはたらかせることに困難があることが示唆される。うつ病者の職場復帰に向けてのリワークプログラムなどでは，集団プログラムを導入することが多く，吉原・岩井・田中ら（2018）は対人交流から得られるプラスの経験が重要であることを指摘している。このようにうつ病者の職場復帰に向けて集団の中で他者と交流を持つ機会を提供することは欠かせないものであると考えられるが，そのような場においては，抑うつ状態が十分改善されていない場合は無理のない範囲で話をしてもらう配慮が必要になると考えられる。特にポジティブな経験を他者に話すということは抑うつ者にとって心理的負担が大きいであろうことは支援者として考慮しておくことが大切であると考えられる。

6. 本研究の限界と課題

本研究では開示抵抗感，語りたい具体的出来事，その出来事を語りたい理由に抑うつと自尊心が及ぼす影響を見出し，自伝的記憶の社会的機能について考察したが，本研究の限界と課題として次の 3 点が考えられる。第一に下位尺度の中にはα値が十分であるとはいえないものもあり，また全体的に重回帰分析では決定係数の値が低く，回帰式が有意ではないものもみられた。このことから，開示抵抗感や語りたい理由の測定に関しては尺度のさらなる検討が必要であると考えられる。また話し手の特性として Alea & Bluck（2003）は年齢，性別，パーソナリティを挙げている。本研究の結果からも性差の影響がみられる側面があることが示唆された。なぜ性差が認められるのか，そこにはパーソナリティの影響が交絡している可能性もあるだろう。本研究では対象者の年齢に幅がなかったこともあり，年齢の影響は認められなかったが，今後は幅広い年齢層を対象として，パーソナリティなどの変数も加え

た検討が必要であると考えられる。

第二に，本研究は Alea & Bluck（2003）の概念モデルの一部を取り上げ，探索的に検討を行ったものであり，中でも聴き手の特性や話し手と聴き手の関係性，文脈の影響，出来事の内容そのものを取り上げてはいない。特に，「語り」や開示抵抗感を検討する上では，どのような場でどういった他者に対して何をどう語るのかという包括的な視点が重要であると考えられる。また本研究からは記憶の概括性や具体性が社会的機能に関連することが示唆された。今後の研究ではこれらの点も加え，より包括的に検討することが望まれる。

最後に，本研究では抵抗感や語りたい理由の検討から自伝的記憶の社会的機能を考察するという間接的な方法を用いた。測定方法も探索的で，十分綿密なものであるとはいえないかもしれない。Beike，Brandn & Cole（2016）は精緻な手続きを用いて，自伝的記憶の社会的機能について直接的に検討を行っており，親密性への影響について明らかにしている。メンタルヘルスの問題と自伝的記憶の社会的機能との関連を明らかにする上でも，今後は実験的手法を用いるなど手続きやデザインを緻密に検討・工夫し，直接的にアプローチしていくことが必要である。自伝的記憶の社会的機能についてはまだ実証研究は多くはなく，特に教訓・情報提供機能については明らかになっていない点が多いといえる。新たな測定方法を考案することも一つの課題であり，より厳密で精緻な手続きを用い知見を重ねていくことが望まれる。

V．謝　辞

弘前大学教育学部卒業生の佐藤詩織氏には調査実施とデータ入力に際してご協力いただきました。心より感謝申し上げます。

なお本研究は科学研究費補助金（課題番号 20730441）の助成を受け実施されました。記して御礼申し上げます。

付　記

本研究は，東北心理学会第 63 回大会で発表された内容を再分析・再構成したものである。

文　献

1) Alea N, & Bluck S (2003) Why are you telling me that? A conceptual model of the social function of autobiographical memory. *Memory*, 11, 165-178. doi: 10.1080/09658210244000342
2) Alea N, & Bluck S (2007) I'll keep you in mind: The intimacy function of autobiographical memory. *Applied Cognitive Psychology*, 21, 1091-1111. doi: 10.1002/acp.1316
3) Beck AT, Steer RA & Brown GL (1996) Manual for the Beck Depression Inventory-Second Edition. The Psychological Corporation. 小嶋雅代・古川壽亮(訳著) (2003) 日本版 BDI-Ⅱ：ベック抑うつ質問票. 日本文化科学社.
4) Beike DR, Brandon NR & Cole HE (2016) Is sharing specific autobiographical memories a distinct form of self-disclosure? *Journal of Experimental Psychology: General*, 145, 434-450. doi: 10.1037/xge0000143
5) Bluck S (2003) Autobiographical memory: Exploring its functions in everyday life. *Memory*, 11, 113-123. doi: 10.1080/09658210244000306
6) Brewer WF (1986) What is autobiographical memory? In DC Rubin (Ed.), Autobiographical memory. Cambridge University Press, 25-49.
7) 独立行政法人労働政策研究・研修機構. 第 2 回日本人の就業実態に関する総合調査―第 1 分冊 本編― (2016 年 8 月). 2019 年 5 月 27 日最終閲覧. https://www.jil.go.jp/kokunai/reports/documents/report007.pdf
8) 独立行政法人労働者健康安全機構. メンタルヘルス不調をかかえた労働者に対する治療と就労の両立支援マニュアル (2017 年 3 月). 2019 年 5 月 27 日最終閲覧. https://www.johas.go.jp/Portals/0/data0/kinrosyashien/pdf/bwt-manual_mentalheath.pdf
9) 遠藤公久 (1994) 自己開示における抵抗感の構造に関する検討. 筑波大学心理学研究, 16, 191-197.
10) 榎本博明 (1997) 自己開示の心理学的研究. 北大路書房.
11) 五十嵐良雄 (2017) うつ病の治療：リワークプログラムの治療的効果. 日本臨牀, 75, 1562-1568.
12) 五十嵐良雄・大木洋子 (2017) うつ病患者の社会復帰：リワークプログラム利用の効果. *Progress in Medicine*, 37, 1393-1398.
13) 片山美由紀 (1996) 否定的内容の自己開示への抵抗感と自尊心の関連. 心理学研究, 67, 351-358. doi: 10.4992/jjpsy.67.351
14) 厚生労働省. 平成 29 年(2017)患者調査の概況 (2019 年 3 月 1 日). 2019 年 5 月 27 日最終閲覧. https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/kanja/17/dl/kanja.pdf
15) 厚生労働省・独立行政法人労働者健康安全機構. Relax 職場における心の健康づくり～労働者の心の健康の保持増進のための指針～ (2019 年). 2019 年 5 月 27 日最終閲覧. https://www.mhlw.go.jp/content/11300000/000499488.pdf
16) 松本昇・望月聡 (2012) 抑うつと自伝的記憶の概括化―レビューと今後の展望―. 心理学評論, 55, 459-483. doi: 10.24602/sjpr.55.4_459

17) 松下智子（2005）ネガティブな経験の意味づけ方と開示抵抗感に関する研究．心理学研究, 76, 480-485. doi: 10.4992/jjpsy.76.480
18) 野村晴夫（2008）自己を語ることと想起すること―心理療法場面を手掛かりとしたその機能連関の探索―．心理学評論, 51, 99-113. doi: 10.24602/sjpr.51.1_99
19) 小口孝司（1989）開示者のパーソナリティについての開示者・受け手による判断の一致度と自己開示動機との関係について．心理学研究, 60, 224-230. doi: 10.4992/jjpsy.60.224
20) 小塩真司（2001）自己愛傾向が自己像の不安定性，自尊感情のレベルおよび変動性に及ぼす影響．性格心理学研究, 10, 35-44. doi: 10.2132/jjpjspp.10.1_35
21) 音羽健司（2017）リハビリテーション医療における心理療法の活用．*MEDICAL REHABILITATION*, 208, 1-6.
22) 清水裕（2001）自己評価・自尊感情．堀洋道(監修)，山本真理子(編)，心理測定尺度集 I：人間の内面を探る〈自己・個人内過程〉．サイエンス社, 26-43.
23) 田上恭子（2002）抑うつにおける自己関連的な認知のネガティブ・バイアス：気分一致効果に着目して．心理学研究, 73, 412-418. doi: 10.4992/jjpsy.73.412
24) 田上恭子（2017）抑うつにおける記憶バイアスに特性メタ感情が及ぼす影響~うつ病の予防・再発防止に向けて~. *Total Rehabilitation Research*, 4, 10-24. doi: 10.20744/trr.4.0_10
25) Williams JMG, Barnhofer T, Crane C, Hermans D, Raes F, Watkins E & Dalgleish T (2007) Autobiographical memory specificity and emotional disorder. *Psychological Bulletin*, 133, 122-148. doi: 10.1037/0033-2909.133.1.122
26) 山本真理子・松井豊・山成由紀子（1982）認知された自己の諸側面の構造．教育心理学研究, 30, 64-68. doi: 10.5926/jjep1953.30.1_64
27) 吉原絵里・岩井龍之介・田中佐千恵・小林正義・鷲塚伸介（2018）気分障害患者に対するリワークプログラムの有効性の検討．作業療法, 37, 352-360.

DOI: https://doi.org/10.20744/trr.7.0_45
Total Rehabilitation Research, VOL.7 45-60

Original Articles

Influences of Depression and Self-esteem on the Social Function of Autobiographical Memory

Kyoko TAGAMI[1)]

1) School of Nursing & Health, Aichi Prefectural University

ABSTRACT

The influence of depression and self-esteem on hesitation for disclosure of specific events and reasons for narrating events were investigated to clarify the social function of autobiographical memory in depression. University students (N=196) completed questionnaires assessing their hesitation for disclosure of negative and positive events, briefly described a specific event they wanted to narrate, rated its degrees of pleasantness and importance, as well as responded to items inquiring the reasons for narrating the specific event. They also completed the Self-Esteem Scale and the Beck Depression Inventory-Second Edition. Hierarchical multiple regression analysis for disclosure of negative events indicated that depression and self-esteem influenced different aspects of hesitation. The hesitation for the disclosure of a positive event suggested that when the level of depression was high, the hesitation for disclosure was also high. Moreover, self-esteem did not influence the hesitation for disclosure of a positive event. Furthermore, participants more often wanted to narrate positive and important episodes. Additionally, participants that wanted to narrate a negative event were more depressed, whereas participants that wanted to describe a negative and unimportant episode had low self-esteem. The analyses of the reason for narrating an event indicated that participants with high self-esteem narrated events to elicit the empathy of others, to enhance intimacy, to present themselves positively, and to entertain others. These findings are discussed in terms of social functions of autobiographical memory, and psychological support for social rehabilitation of depressed people.

Received
May 30, 2019

Revised
June 11, 2019

Accepted
June 14, 2019

Published
June 30, 2019

＜Key-words＞
autobiographical memory, social function, depression, hesitation for disclosure, self-esteem

tagamik@nrs.aichi-pu.ac.jp（Kyoko TAGAMI）

Total Rehabilitation Research, 2019, 7:45-60. © 2019 Asian Society of Human Services

Total Rehabilitation Research

EDITORIAL BOARD

EDITOR-IN-CHIEF

Masahiro KOHZUKI Tohoku University (Japan)

EXECTIVE EDITORS

Changwan HAN University of the Ryukyus (Japan)

Aiko KOHARA
University of the Ryukyus (Japan)

Daisuke ITO
Tohoku Medical Megabank Organization (Japan)

Eonji KIM
Miyagigakuin Women's University (Japan)

Giyong YANG
Pukyong National University (Korea)

Haejin KWON
University of Miyazaki (Japan)

Hitomi KATAOKA
Yamagata University (Japan)

Hyunuk SHIN
Jeonju University (Korea)

Jin KIM
Choonhae College of Health Sciences (Korea)

Kyoko TAGAMI
Aichi Prefectural University (Japan)

Makoto NAGASAKA
KKR Tohoku Kosai Hospital (Japan)

Masami YOKOGAWA
Kanazawa University (Japan)

Megumi KODAIRA
International University of Health and Welfare Graduate School (Japan)

Minji KIM
National Center for Geriatrics and Gerontoligy (Japan)

Misa MIURA
Tsukuba University of Technology (Japan)

Moonjung KIM
Korea Labor Force Development Institute for the aged (Korea)

Shuko SAIKI
Tohoku Fukushi University (Japan)

Suguru HARADA
Tohoku University (Japan)

Takayuki KAWAMURA
Tohoku Fukushi University (Japan)

Yoko GOTO
Sapporo Medical University (Japan)

Yongdeug KIM
Sung Kong Hoe University (Korea)

Yoshiko OGAWA
Teikyo University (Japan)

Youngaa RYOO
National Assembly Research Service: NARS (Korea)

Yuichiro HARUNA
National Institute of Vocational Rehabilitation (Japan)

Yuko SAKAMOTO
Fukushima Medical University (Japan)

Yuko SASAKI
Sendai Shirayuri Women's College (Japan)

EDITORIAL STAFF
EDITORIAL ASSISTANTS

Mamiko OTA Tohoku University / University of the Ryukyus (Japan)

Sakurako YONEMIZU University of the Ryukyus (Japan)

as of April 1, 2018

Total Rehabilitation Research

VOL.7 June 2019

© 2019 Asian Society of Human Services

Presidents | Masahiro KOHZUKI & Sunwoo LEE

Publisher | Asian Society of Human Services
#216-1 Faculty of Education, University of the Ryukyus, 1, Senbaru, Nishihara, Nakagami, Okinawa, 903-0213, Japan
FAX: +81-098-895-8420 E-mail: ashs201091@gmail.com

Production | Asian Society of Human Services Press
#216-1 Faculty of Education, University of the Ryukyus, 1, Senbaru, Nishihara, Nakagami, Okinawa, 903-0213, Japan
FAX: +81-098-895-8420 E-mail: ashs201091@gmail.com

Total Rehabilitation Research
VOL.7 June 2019

CONTENTS

Original Articles

Communication Gaps in Interprofessional Collaboration between Medical and Welfare Professionals

Miki ARAZOE 1

Research on the Meaning of Support for Promotion of Self-understanding for Persons with Psychiatric Disorder at Vocational Rehabilitation;
Integrative Analysis with Text-maining

Kazuaki MAEBARA 22

Development of Questionnaires for High-School Students and Adults Version of Scale for Coordinate Contiguous Career (Scale C^3);
Focusing on Verification of Construct Validity Using Structural Equation Modeling

Changwan HAN 34

Influences of Depression and Self-esteem on the Social Function of Autobiographical Memory

Kyoko TAGAMI 45

Review Article

Basic Study for the Development of the Teaching Method based on the Relationship between Psychology, Physiology and Pathology of Children with Health Impairment

Haruna TERUYA et al. 61

Short Papers

Developing an ICT-based System to Support Care-dependent Older Persons to Continue to Live in Their Own Homes;
User Interface Evaluation

Kazutoshi FURUKAWA et al. 70

Basic Study for Development of Assessment INDEX of Psychology, Physiology and Pathology for Intellectual Disability Children;
From Point of Change of Diagnostic Criteria and the Definition of the Concept of Adaptive Behavior

Mamiko OTA et al. 83

Published by
Asian Society of Human Services
Okinawa, Japan